

# THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2020年3月1日発行  
発行者 本多 弘之  
編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）  
〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11  
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901  
e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp  
ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>  
Facebook <http://facebook.com/shinran-bc>  
Twitter [https://twitter.com/shinran\\_bc](https://twitter.com/shinran_bc)

2020.3  
第72号

## 三宝としてのサンガ考

親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰

三宝（仏法僧）の僧（サンガ）は、仏・法に対して二次的・三次的なものではない。今ここに現前する仏道を歩む人々の集まりであり、もとより理念的・抽象的なものでもなかった。

8世紀、授戒師を求めて日本から唐へ渡った栄叡と普照は、「仏法東流し、日本国に至る。其の法有り<sup>いぼど</sup>と雖も、而も<sup>しか</sup>伝法の人無し」（『唐大和上東征伝』）と述べ、かの鑑真和上に来朝を求めたと伝えられる。かくして鑑真は苦難の海路を越え、我が国に仏法を伝え、仏教者を生み出す「授戒」という必須の儀式を執行したのであった。「法」はあるが、それを伝える「人」（伝法の人）がないという日本人僧二人の言葉は、当時の仏教界の切実な問題であったと同時に、教えさえあればそれが自動的に広まることなどありえないという仏道伝承の根本的な問題を提起している。

かつて中国では、仏教を受容するにあたって、仏教語を分析・整理する営みがあった。その一つに三宝の考察があり、インド伝来の三蔵（経律論）の中にさまざまな三宝が説かれることから、それを三種から数種に分類する作業がなされた。こうした営みは著名なもので隋・慧遠の『大乘義章』（卷十「三歸義」）や、唐・慈恩大師基の『大乘法苑義林章』（卷六「三宝義林」）などの中に見られる。例えば仏宝なら、法身<sup>ほっしん</sup>もあれば、歴史上に人格をもって存在した釈尊を指す場合もある。法宝にも、

理法そのものを指す場合と、釈尊が説かれた言葉としての教えを指す場合などがある。

ならば、当時の中国人仏教者にとって、今ここに具体的に存在する三宝とは何か。法身<sup>ほっしん</sup>が尊い<sup>しうじや</sup>といっても、聖者でもなければ出会えない。この世にブツダとして釈尊が出現したと聞いても、インドとは距離も隔たり、時代も違う。だから彼らにとって目の前に存在する三宝とは、木などで表象された仏像（仏宝）であり、紙に書かれた経巻（法宝）であり、煩惱を具足する修行者の集まり（僧宝）であった。そしてこの三宝は「住持三宝」と呼ばれたのである。

隋・唐期以前の南北朝時代の仏教文献には、この住持三宝に相当する三宝が「名字三宝」と呼ばれている例が見出せる。多少の推測が許されれば、南北朝から隋唐へと移行するあるとき、より積極的な意味を見出そうとした名称の変更運動が起こったのではないか。すなわち、具体的姿で現前する三宝は、名ばかりの三宝ではなく、これによって仏法が未来へと住持されるのである。

『論語』（衛霊公第十五）には、「人能く道<sup>ひろ</sup>を弘む。道の人を弘むるに非ざるなり」という名文がある。唐・南山道宣は、仏典ではなくこの中国古典を依用して、住持三宝の存在意義を語っている。すなわち僧（サンガ）によってこそ仏と法とが住持され興隆していくのだと。

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

## 「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤1

# 本当の依り処

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第126回から128回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第124回からその一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

「愛宝貪重にして、心勞し身苦し。かくのごとくして竟りに至りて恃怙するところなし」（『真宗聖典』69頁、東本願寺出版）。「恃怙」というのは、「恃」も「怙」もたのむという字です。時間的にずっとたのむようなことではないものを、一応、依り処にする、たのみとする。その場合、本当にたのむということになってない。

依り処というと、曇鸞大師が解釈の中で出しているのですけれども、いろんな罪を犯したりしているのを、我々の価値観ではたった一度の念仏ぐらいで消せるはずがないと。罪の深さが感じられれば感じられるほど、念仏を一回称えたら消えるなどそのようなはずがないと思ってしまう。人間の妄念の中で、犯す罪の重さと念仏の重さを比べて、称える念仏の重さではとても犯罪の重さにはかなわないと。こういう人間の考え方は、仏陀の覚りの智慧からすれば妄念でしかないような知恵を根拠に生きてしまっているから起きてくる。独善的に自分が正しいと思って生きてしまっている。そういう秤で計っているのが我々人間の人生の目盛りであると。

如来の大悲が本当に苦悩の衆生を救い取らんがために案じ出した、それが名号という方法である。この名号の方法を受け止めてそれを行わずという場合には、依り処が変わるのだと。妄念の立場を



転じて、如来の大悲の智慧の立場を依り処にすることによって、重みがまったく変わる。こういう譬喩で曇鸞大師は教えておられます。

つまり依り処が変わるといことが、価値の転換という意味をもたらすことになるのです。我々は妄念で愛着の心で、重いか軽いか、正しいとか間違っているとかと判断し続けてきているけれど、その延長上で念仏を考えるのは間違いなのだ。念仏の立場は如来大悲の立場だと。これを本当に受け止めるか受け止めないか、依り処に取るか取らないかという問題は、今度は人間の「信」の問題、信ずるとい問題なのです。それなしに行じたのでは妄念でしかない。そういう意味で、本当の依り処という問題を人間はどこかでしっかりと考えなければならない。

蓮如上人のお書きになった御文に「白骨の御文」と言われるものがありますが、人間の人生ははかない、百年ともたないのだと言われた後で、亡くなってしまうえば白骨になるのだぞと。だから後生の一大事をたのめと、こう言うのです。論理転換が激しいので、我々が拝読していても、どうしてそうなるのかがよく分からない説得の仕方なのですけれども、情念としてはかないのだぞと教えておいて、だから依り処をしっかりと立てなさいと言っているのです。それを「後生の一大事」と言うから、何か後生というのがあるのかなとか、現代の生活からすると何のためにそういうことを教えるのかがよく分からない。でも、あれは本当の依り処をしっかりと、はっきりとさせなさいということを言っているのです。そういうことを思うのです。

本研究会では「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘から問題提起していただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

### 第62回

## 「ポスト真実」時代の 輿論主義と世論主義

佐藤 卓己氏（京都大学大学院教育学研究科教授）

2019年9月30日に、メディア論を専門とされる佐藤卓己先生（京都大学大学院教育学研究科教授）をお呼びして研究会が開催された。フェイクニュースがあふれているとされる現代はメディア論からはどのように見えるのか、またメディア論とジャーナリズム論の違いは何かなど様々なテーマを提供していただいた。私達の生活と切り離せないメディアを再考することにより、現代を学ぶ研究会となった。以下に、講義の一端を報告する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳）

### ■「真実を伝えよ」

現在はフェイクニュースがあふれている「ポスト真実の時代」だと言われます。しかし、これは新しい現象なのでしょうか。ポストの前には「真実の時代」があったということになります。しかし、「真実の時代」のほうが本当はもっと問題ではないかと考えることもできます。なぜならばメディアは真実を伝えるべきだという考え方は、基本的にプロパガンダの発想なのです。ナチスドイツのゲッベルスも、ソビエトのスターリンもメディアには「真実を伝えよ」と要求し続けました。それは当然、彼らの目から見ての真実であり、それ以外は、メディアに載らなかった時代でもあります。

### ■プロパガンダの代用語

そもそも「マスコミュニケーション」とは、どういう言葉なのでしょう。実はプロパガンダを置き換えるべくアメリカで出来た代用語なのです。プロパガンダはナチスや共産主義者がやっているの、民主主義国家のアメリカでは使えない。我々がやるプロパガンダは「マスコミュニケーション」と呼びましようということで出来た新語です。そうすると、まさに「真実の時代」の息苦しさを、我々は忘れていないかという問題にもなるのです。

### ■「メディア論」と「ジャーナリズム論」の違い

私は大学でメディア文化論を教えています、



最初にする話は、「ジャーナリズム論とメディア論の違いは何か」についてです。ジャーナリズム論は、多くの大学で行われています。それは現場のジャーナリストや、退職された方が教えていることも多いと思います。しかし、私がこれからお話しするメディア論、あるいはメディア文化論は、ジャーナリズム論とは異なるものです。どのような点が違うか。それはジャーナリズム論は基本的に「真か偽か」「正しいか間違っているか」を問題にします。それに対して、メディア論は、もともとマスコミュニケーション研究を前提に成立したということもあり、「真か偽か」ではなくて、「効果があるかないか」を問題とします。つまり内容の真偽ではなくて、効果の大小を問題にするのがメディア論であると言えばわかりやすいですね。

### ■情報の影響力

つまり極端な話、嘘であっても影響力のある情報というのは、重要な研究対象となるわけです。それに対して、ジャーナリズム論においてフェイクニュースははじめから退けられることとなります。「真か偽か」を問題にするのですから、そうなります。しかし、メディア論においては、フェイクかトゥルースか、真か偽かというよりも、その情報がどの程度の影響力をもつかに研究の力点があるのだと説明しています。

### ■あいまいさに耐える

「真か偽か」という判断はAIが最も得意とするところです。しかし逆にAIが一番苦手とするのは、あいまいな情報なのです。そのあいまいな情報を「ポスト真実」という形で退けてしまうのでしょうか。恐らく人間としての私達の生き方が、まさにAI化するような社会をつくることになってしまいます。そのようにならないためにも、如何にあいまいさに耐えるべきかをメディアリテラシーの問題として提起したいと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

## 「三宝としてのサンガ論」研究会報告⑤

# 西大寺叡尊と非人 —叡尊の自伝『感身学正記』を中心に—

細川涼一氏 (京都橋大学文学部教授)

2019年11月14日、京都橋大学の細川涼一先生をお招きして、「三宝としてのサンガ論」外部講師招聘研究会を開催した。親鸞と近い時代を生きた律僧・叡尊やその弟子・忍性の活動理念、そして中世身分制研究の諸問題について詳しく問題提起をして頂いた。ここにその一部を報告する。

(親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰)

### ◇非人とはどういう人たちだったのか

中世の身分制や非人については複雑な研究史があります。今日は叡尊の側から見た非人の話が中心となりますが、まず非人という人たちの実態や存在形態がどういうものであったかを考えなければなりません。京都最大の非人居住地であり、叡尊の非人救済事業の対象であった清水坂非人の成立を示す史料がいくつかあります。それらによれば11世紀の段階で、京都の清水坂に食料等を施される人たちが集まり、その人々は仏事に際して米を受け取っていたことなどが示されています。また、病や身体の障害によって社会から脱落・排除されていた人たちが清水坂に住み、さらに非人の中に序列が生じていたことなども示されています。

### ◇叡尊の非人救済のはじまり

『感身学正記』は非人の生活実態が分かる鎌倉時代の重要な史料です。これによれば、仁治二年(1241)に叡尊・忍性の非人救済のはじまりが見出せます。この段階では大和国の一地域でのローカルな活動でありましたが、それが建治元年(1275)の清水坂での活動になると、当時の政権からも注目されるような大きな活動になっていき、その中で叡尊は非人に大乘菩薩戒や八斎戒を授けています。

非人は社会から脱落・排除されていたといっても、収入を得て生活していかなければなりませんから、その人たちは京都の民衆に死者が出た際に遺体の運搬をするなどの仕事に従事してしま



た。また、堂塔供養などの仏事に際しては、非人施行によって供物を受け取るなどしていました。その他、癩病(ハンセン病)の人を仲間に取り込み、京都の町では物乞いをするなどして生活していた実態が知られます。

### ◇叡尊や忍性の救済活動の意義

叡尊の非人救済は、忍性との出会いが機縁になっており、その背景には文殊信仰がありました。非人を取り巻く中世の社会の中で、叡尊は非人たちを集め、「生身の文殊菩薩」に見立てて供養・救済を実践していたことが『感身学正記』に記されています。

彼らの活動は、例えば遊郭で働く女性がいたとして、彼女らを別の職業に就かせようとする慈善活動とは異なります。遊女だけではなく、非人や漁師など、こうした人々が今生きている身分・職業などの現実をそのまま受け入れ、彼らの生業を認めたくえでその生計を支援していこうとするものでした。

こうした叡尊や忍性の活動は、仏教の理想にあわせて、現実を変えていこうとする運動ではありませんでした。鎌倉時代の社会の現実が、理想通りにいかないことを実感し、仏教の理想と当時の現実との間で、いかに折り合いを付けるかを課題として活動していました。乞食を生業とする非人への施行も、こうした現実主義的な立場からなされた活動だったのです。

(文責：親鸞仏教センター)

※細川氏の講義は、諸史料を丁寧に提示・読解の上、問題提起を頂いたが、本報告では紙幅の関係で史料の名称等、典拠の表記を省略した。詳細は『現代と親鸞』に掲載予定。また「非人」等の表現については、中世社会の現実を学問的・史的に検討していく上で、そのまま表記・使用している。

# 近現代『教行信証』研究

## 検証プロジェクト 第2期への展望

近現代『教行信証』研究検証プロジェクト（以下、本プロジェクト）は、現代に至るまでの『教行信証』研究を検証し、親鸞に直接する『教行信証』の読解を目指して、2016年に発足したものである。そして第2期となる2019年からは、親鸞仏教センター研究員の東真行・藤村潔両氏の参画を得て、新しい体制のもとで取り組みを進めていくこととなった。ここに、その概要と今後の課題について報告する。

（大谷大学真宗総合研究所東京分室PD研究員 青柳 英司）

### ◆研究体制

本プロジェクトでは、2016年からの3年間を研究検証の準備期間とし、『教行信証』読解の視座や方法の確認、構造や撰述意図、撰述年次に関する研究の検証などを実施した。その成果や活動の記録は、『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト研究紀要』（親鸞仏教センター）に収録されている。

そして2019年からは新しいメンバーも加わり、いよいよ『教行信証』本文の研究検証に入ることとなった。具体的には、大谷大学真宗総合研究所東京分室PD研究員の青柳英司が「総序」から「信巻」を、真宗大谷派教学研究所助手の藤原智が「証巻」から「化身土巻」を担当する。その上で東真行と藤村潔の両氏は、青柳の研究分担者としてそれぞれ「正信偈」と「信巻」後半の『涅槃経』引文を担当することとした。また、真宗大谷派教学研究所研究員の名和達宣がオブザーバーとして参加し、本プロジェクトに対する助言や問題提起を行う。

### ◆今後の課題

本プロジェクトは大別すると、以下の2つの課題を有する。1つは「研究史の整理」であり、もう1つは「先行研究の批判的検証」である。まず前者についてだが、本プロジェクトは中世・近世の研究を無視するものではない。むしろ、近世以前から近代への思想的転換点を明らかにすることが、本プロジェクトの大きな目的の1つである。そのためには、「近世以前にはどのような『教



行信証』解釈があったのか？」「それはどうして生まれたのか？」「それらの解釈のうち、近代教学が継承したものは何であり、転換させたものはどれであったのか？」「どうして近代教学は、解釈を転換させる必要があったのか？」といった問題に答える必要がある。これが、1つ目の課題である。

次に後者だが、先行研究は必ずしも、親鸞自筆の『教行信証』（坂東本）に依拠してはいない。特に大正期以前の研究は、坂東本を参照していない場合が大半である。これに対して真宗大谷派では、2011年の「親鸞聖人七百五十回御遠忌」を記念して、親鸞自筆の『教行信証』である坂東本の翻刻と、影印本の刊行とが行われた。これは『教行信証』の書誌学的・文献学的な研究の1つの到達点であり、後世の書写本や解釈の影響を取り除いて、親鸞の言葉遣いに直に接することを可能にしたと言える。

また近世の末期頃から、『教行信証』の対論者を比定する研究が見られる。具体的には、いわゆる浄土異流や明恵の『摧邪輪』、『興福寺奏状』、『延暦寺大衆解』などが、『教行信証』の論述に影響を与えていると指摘されている。さらに、当時の天台教学の動向などについても、解明が進みつつある。

これらの成果を参照することによって、親鸞が生きた言語空間・思想空間を浮き彫りにし、親鸞が抱いていた「問い」に迫ることが、ある程度可能であろう。本プロジェクトにおいても、この作業を通しながら『教行信証』を再読し、先行研究の意義と妥当性を検証して、さらに先行研究では考えられていなかった問題点を炙り出すことも目指す。これが2つ目の課題である。

以上のような研究検証を進めながら、『教行信証』の現代的解釈を試み、現代社会へと発信していく基盤を構築していきたい。

《語註》

首楞嚴院：比叡山延曆寺横川の中堂の異称。源信が住した。

源信：(九四二—一〇一七) 四十四歳の時『往生要集』を著し、末法濁世の凡夫のために、煩惱によって穢された世界(穢土)を厭い離れ、阿弥陀仏の極楽世界(浄土)を欣求すべきことを勧めた。

往生要集：三卷。源信の著。日本における最初の本格的な浄土教の典籍。広く経典などから極楽往生に関する重要な文を集め、念仏が浄土往生の要であることを明らかにした書。

煩惱：親鸞は、「煩は、みをわずらわす。惱は、こころをなやまず」と定義している。代表的なものに、貪欲(「むさぼり）・瞋恚(「いかり）・愚痴(「おろかさ)があり、三毒の煩惱ともいう。

阿弥陀仏：阿弥陀とは、サンスクリット語の Amitābha アミターバ(光明無量)、Amitāyus アミターユス(寿命無量)の音写であり、二つの意味がある。阿弥陀仏という仏の名としても、「無量光」という光をあらわす名と、「無量寿」といういのちをあらわす名との両面があるが、阿弥陀という略称にて、両方の意を包んでいる。すなわち、「苦悩する一切衆生を救い遂げずにはおかない」と誓う、大慈大悲の本願のはたらきが名となってあらわれているのである。

光明：仏・菩薩の身心より発する光。ここでは我々衆生の無明の闇を破り、本来の願いを満たす阿弥陀仏の智慧のはたらきを象徴している。

現代語化をめぐって

「我亦在彼損取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身」。親鸞は、ここに源信の本心があると見きわめたのではないか。親鸞は、「信巻」(「教行信証」)に引いている、この源信の言葉を『尊号真像銘文』『末巻』のはじめに取りあげて、機法「種深信」という真実信心の構造を明示しようとしているように思われる。その「眼を闇に閉ざされるよつな身が光に照らされる」という矛盾的構造を表現する

ことが現代語化のポイントである。そのことを端的にあらわすのが「雖(いえども)」「という一語である。そこに、真実なるものを求めて出逢えない、かえって背き続けるより他はない、人間としての深い悲しみがあらわれているのを感じる。それに応じて、強い逆接の意を表現する「にもかかわらず」と、言葉を当てた。「不能見」のところに、「こちらの眼では、じつしても見

ることができない」という「不可能性」を「断絶」を表すため句点を打ち、文を区切ることによって強調した。すなわち、こちらからいえば、じつしても見えない。けれども、あきらめることもできない。つまりは、苦しみに沈んで終わっていくしかないはずなのである。「にもかかわらず」、大悲は照らす。そこに、「苦悩するものを見捨てない」、大いなる慈悲が実動するのが不思議である。

のものに至り届く。そういうはたらきに目覚めた信心の人を、常に照らし出してくださいというのである。また、常に照らすとは、常に変わることなく護ってくださいということである。阿弥陀仏という光明は、私たち誰も皆を、煩惱の身であると見通され、そういう罪深く悪重い存在である私たちにこそ、大いなる悲しみを注がれ、根源的願いをかけていってください。そのように気づかされて、信じる心を、いつも守護していただくというのである。

「我身」とは、煩惱の身であるこの私自身を、阿弥陀仏の大いなる慈悲は、飽きることなく、決して見捨てることなく、いつどんな時でも護っていただくさと、心に刻みなさいということである。つまりは、阿弥陀仏の撰取不捨という大慈悲の御こころをあらわされているのである。これは、「念仏衆生 撰取不捨」(『仏説観無量寿経』の文)の真意を、源信和尚があきらかにしてくださいっていると、知りなさいということである。

問題提起

『尊号真像銘文』の「末卷」は、日本における浄土教の夜明けを担った源信和尚の銘文からはじまる。親鸞は、「末巻」を買くテーマとして、「闇」と「光」という譬喩で表現された真実信心の内実を解き明かす。その親鸞のいう信心が、現代に向かって何を訴えかけているのかに迫りたい。

現代の「闇」は、たとえば「わかる」というところにあ

るのではないか。「自分はわかるものでなければならぬ」ということを前提に、自分のわかっていることを正義のようにして責め裁き、自分のわからないものは、信じられないし、無価値なものであるとさえ決めつける、不寛容な「眼差し」のことである。しかも曰「それは「それでよ」と思っている。にもかかわらず、そこには、「通じ合えない」と

いう苦しみ、いたみが残る。「自分のわかっていることよりも、わからないことの方が大事です」と教えていただいたことがある。わからないさを抱く我が身をも包んで、信じていてくださるような暖かさを実感する中で、親鸞の御まごころをたずねたい。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池 弘宣）

【原文】

尊号真像銘文末

首楞嚴院源信和尚の銘文

「我亦在彼撰取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身」（往生要集）文  
「我亦在彼撰取之中」というのは、われまたかの撰取のなかにありとのたまえるなり。「煩惱障眼」というのは、われら煩惱にまなこさえらるとなり。「雖不能見」というのは、煩惱のまなこにて仏をみたてまつることあたわずといえどもというなり。

「大悲無倦」というのは、大慈大悲の御めぐみのうきことましまさずともうすなり。「常照我身」というのは、常はつねにといふ。照はてらしたまうという。無碍の光明、信心の人をつねにてらしたまうとなり。つねにてらすというは、つねにまもりたまうとなり。

我身は、わがみを大慈大悲ものうきことなくして、つねにまもりたまうとおもえとなり。撰取不捨の御めぐみのところをあらわしたまうなり。「念仏衆生 撰取不捨」のこころを釈したまえるなりとしるべしとなり。

【現代語化】

尊号真像銘文 末卷

首楞嚴院源信和尚の銘文

「我亦在彼撰取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身」（往生要集）文  
「我亦在彼撰取之中」とは、源信和尚が、「煩惱の身の私もまた、阿弥陀仏という、誰一人排除しない「絶対受容」のはたらきの中にいる」とおっしゃっているのである。「煩惱障眼」とは、私たちは煩惱の闇に心の眼が覆われているということである。「雖不能見」とは、煩惱にさえぎられるような心の眼では、悲しいかな、どうしても阿弥陀仏を拝見することができない。にもかかわらず、ということである。

「大悲無倦」とは、阿弥陀仏の大きいなる慈悲のはたらきは、私たちを決して見捨てることはない、と申し上げているのである。「常照我身」とは、「常」は我が身が、いつどのような状況にあらうとも、常に変わることなく、ということである。「照」は照らし出してくださいということである。阿弥陀仏という光明のはたらきは、煩惱にさまたげられることなく、全て

## 「近現代の真宗をめぐる人々」第8回

ちかづみじょうかん  
近角常観 [1870-1941]

明治後期の煩悶の時代、東京を彷徨する青年・知識人たちの思想形成に深い影響を与えた真宗僧侶が近角常観である。

常観の出生地は琵琶湖の北湖畔に位置する湖北町延勝寺。東京本郷に設立された寄宿舎「求道学舎」や教会堂「求道会館」における明治近代に呼応した布教活動や『歎異抄』の教説によって広く知られるが、突出しているのは宗教的信念に基づく対話であろう。この信念の骨格や生き様の決定的な確立は故郷の地で定まっている。

常観27歳の時である。大学を休学して恩師清沢満之を中心とする宗門改革運動に挺身するが、その挫折は帰郷療養するまでに彼を追い詰めた。明治30（1897）年9月17日、深刻な煩悶を抱えた常観は、ふと見上げた湖北の空に生涯が定まる回心を実体験する。

「病院から帰り途に、車上ながら虚空を望み見た時、俄に気が晴れて来た。これまでは心が豆粒の如く小さくあつたのが、此時胸が大に開けて、白雲の間、青空の中に、吸い込まれる如く思はれた」（『懺悔録』）

真っ青に広がる空に、常観はおぞましい自分の心を知り通して、すべてを受け容れる仏の心を感じず。常観はここを決定的な起点として、体験を教証する思索を重ね、信仰告白を受けて対話する布教活動に生涯を尽くしていった。

先日、常観の自坊である西源寺を訪ねた。お話を伺ったのは門前に住まいする松井甚師さん。印象的だったのは、常観に師事する方が本堂新築を申し出た際、常観は「それは絶対してはならない」と厳しく諫めたことであった。松井さんは「あの時、寄進してもらったら随分楽ができたのに」と笑っておられた。

本堂の欄間には、父常随を中心にして、左右に常観・弟常音の肖像画がかけられている。真宗のことはすべて父に教わったと言い、終生、父を尊敬して止まなかった常観の素朴な感情がここに表れている。本堂新築の話はその心象風景を壊したくなかったからなのか、そんなことが思われた。

(速水 馨)



近角常観肖像画（西源寺所蔵）

## 親鸞仏教センターの動き

(2019年11月～2020年1月) —抄出—

親鸞仏教センターでは、連続講座「親鸞思想の解明」（講師：本多弘之）を2019年11月5日、12月6日、2020年1月9日に開催いたしました。また、月例研究会として、「三宝としてのサンガ論」研究会（戸次顕彰）、「正信念仏偈」研究会（東真行）、源信『一乗要決』研究会（藤村潔、清沢満之研究会（長谷川琢哉）、英訳『教行信証』研究会（田村晃徳）、『尊号真像銘文』研究会（菊池弘宣）を開催いたしました（※括弧内主催研究員）。そして、「研究員と学ぶ公開講座2019」が始まり、藤村研究員（12月担当：[講座名]大乗の「信」を起こす——『大乘起信論』を読む）、東研究員（1月担当：[講座名]「収容所の親鸞」という問い——ソ連領被抑留者の信仰を読む）の講座が行われました。11月14日には、「三宝としてのサンガ論」研究会に細川涼一先生（京都橘大学文学部教授）を講師としてお招きした研究会が行われました。また、12月17日には、橋本健二先生（早稲田大学人間科学学術院教授）をお招きした「現代と親鸞の研究会」が開催されました。詳細は近日中にご報告いたします。

## ■発行のお知らせ（親鸞仏教センター刊行物）

- ・研究誌『現代と親鸞』41号（2019年12月発行）
- ・情報誌『aṅjali』（あんじゃり）38号（2019年12月発行）

## ■論文掲載

- ・中村玲太「顕意の「唯心浄土」批判」（『印度學佛教學研究』第68巻第1号）

## あとがき

一昨年に亡くなった僧侶の大先輩が、「東京大空襲」の話をしてくれたことがあった。

当時13歳であった先輩は、戦火の中で動けなくなった母を背負い、本堂のご本尊を抱えて途方に暮れていた。父や兄は出征しており、誰もが自分の身を守ることで精一杯の状況で、近所の方々に頼ることもできない。先輩は「どうか焼けないでくれ」との思いでご本尊を隣接する墓地に投げ入れ、母だけを背負い防空壕へ走った。しかし、既に満員で入れてもらえず、避難しても生き残れないと言われた地下鉄の駅へ逃げ込んだ。

結果、先輩は地下鉄の駅で難を逃れ、ご本尊も無事だった。一方で、断られた防空壕へ避難した方は全員亡くなったと聞き絶句した。一瞬の出来事で人の生死が左右されるほどの修羅場は、13歳の少年に一生癒えぬ深い傷を負わせた。

あれから75年——。下町の夜空には、光り輝くスカイツリーが見える。「もう、この空に焼夷弾の雨を降らせないでくれ」と、先輩が叫んでいるような気がする。

(小林 信)